

今の私にできること		戸沼 雄介 川崎市立西高津中学校
◆担当教科：社会科	◆実践教科：学活、道徳、総合的な学習の時間	◆時間数：12時間
◆対象学年：中学校2年生	◆対象人数：36名（一部、2クラス 73名、学年 261名で実施）	

○実践の目的

近年、「世界は近くなった」と言われています。確かに、移動手段にとどまらず、通信技術も発達し、外国との結びつきも増していますが、同時に指摘されてきているのが「格差」の問題です。皮肉なことに、技術の発達が格差を広げることにもつながっており、国と国の格差、一つの国の中に存在する国内格差、地域格差など、その規模もさまざまであると言えます。

このような現状から、今、地球規模の課題として、「開発教育」の必要性が増していると言えるのではないのでしょうか。文化・民族・宗教などを異にする世界の人々がともに生きることのできる公正な社会をつくっていくことが、これからの大きな課題であると思います。そのためには、私たちひとりひとりが、こうした問題をよく知り、自分の問題として考え、その解決に向けて行動していくことが必要です。

次代を担う日本の子どもたちに、このような問題をより「身近に」そして「自分ごととして」捉えてもらうためにはどのような工夫ができるのかということ、私は日ごろから考えていました。そのような中、2012年の8月、JICA横浜主催の「教師海外研修」に参加しました。私が経験したことや感じたことを、これからを担う子どもたちにしっかりと伝えて、私たちにできることとは何か、支援とは何かという問題に向き合ってみることで、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方や共に生きる社会について考えてみたいと思います。

○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	<p>テーマ：タンザニアってどんな国だろう？</p> <p>ねらい：タンザニアはどのような国であるのか、写真や地図、さまざまな統計データをもとに、そこから読み取れるイメージを出し合う。</p>	<p>(1) 地図や写真、統計資料から、タンザニアという国についてイメージを持つ。</p> <p>(2) イメージをクラスで発表し合い、共有する。</p>	<p>(1) 地図</p> <p>(2) 写真</p> <p>(3) 統計資料</p> <p>一人あたり GNI、平均寿命、中等学校就学率、エネルギー消費量、1日の供給熱量、5歳未満児死亡率</p>
2 3	<p>テーマ：タンザニアの子どもたちに手紙を書こう！</p> <p>ねらい：教師海外研修で訪れるタンザニアの子どもたちに向けて、スワヒリ語で手紙を書く。</p>	<p>(1) タンザニアの小学校で勤務する青年海外協力隊の方の言葉を紹介する。</p> <p>(2) 自己紹介や質問をスワヒリ語で書く。</p>	<p>(1) 『旅の指差し会話帳 ケニア(スワヒリ語)』</p> <p>(2) google 翻訳(web サイト)</p>
4	<p>テーマ：そうだったのか！ タンザニア！</p> <p>ねらい：第1時限目で出てきたイメージをゆさぶるためのフォトランゲージを行い、新たなイメージをつくる。</p>	<p>(1) フォトランゲージを行ない、気づいたことを写真の脇に書く。(ワールドカフェの手法を用いて別の写真でも同様に行なう)</p> <p>(2) 書かれていることを参考にしながら、どんな写真なのかを発表する。</p>	<p>(1) JICA 横浜 教師海外研修で得た写真9枚</p> <p>(2) タンザニアで撮影した動画(サファリのような、アザンなど)</p> <p>(3) サインペン</p>

5	<p>テーマ:タンザニアで知り合った人々と私たちの暮らし</p> <p>ねらい:タンザニアで知り合った人たちの写真を見て、名前や夢などを予想・確認し、自分たちの夢や欲しいものなど「同じところ」や「違うところ」を認識する。</p>	<p>(1)タンザニアで会った人物(6名)の写真を見せて、名前・年齢・大切なもの・将来の夢などを予想して発表する。</p> <p>(2)実際の回答と自分たちのアンケートを見比べて、同じところと違うところを考える。</p>	<p>(1)アンケート結果(クラスの結果、タンザニアで収集したデータ)</p> <p>(2)タンザニアで出会った人物の写真</p> <p>(3)タンザニアで撮影した動画(日本の中学生へのメッセージ)</p>
6 7	<p>テーマ:ワークショップ・カカオ農園で働く子どもたち</p> <p>ねらい:カカオ農園で働く子どもたちにチョコレートあげるか、あげないかの話し合いを経て、「貧困をなくすためにできること」についてランキングを用いて話し合う。</p>	<p>(1)ビデオを鑑賞し、「自分ならばチョコレートあげるか、あげないか」をワークシートに記入したうえで、班で結論を出す。</p> <p>(2)ビデオの内容を踏まえて、児童労働や貧困をなくすためにできることをランキングし、班で結論を出す。</p>	<p>(1)ビデオ『チョコレートの実』(あいのり ガーナ編)</p> <p>(2)森永乳業 DARS チョコレート</p> <p>(3)ホワイトボード</p> <p>(4)ホワイトボードマーカー</p>
8 9	<p>テーマ:ちがいのちがい</p> <p>ねらい:世界の国々の文化や生活にさまざまなちがいがあることをワークショップを通じて体験し、「支援」の意義や難しさについて考える。</p>	<p>(1)音楽『We Are The World』を聞き、歌詞の意味を考える。</p> <p>(2)ワークショップ「ちがいのちがい」をもとに、あってもよいちがいといけないうちがいを仕分ける。</p> <p>(3)再度、『We Are The World』を聞き、歌詞の意味を考える。</p>	<p>(1)音楽ビデオ『We Are The World』</p> <p>(2)模造紙</p> <p>(3)ちがいのちがい カード(タンザニア編)</p>
10 11	<p>テーマ:村を発展させよう!</p> <p>ねらい:JICAタンザニアの道路事業プロジェクトで訪れた村で行われていた話し合いを教材化し、村を発展させるにはどの事業が必要かを選ぶ話し合いを通じて、支援の意義ややりがいを考える。</p>	<p>(1)村の紹介を、村の写真を見せながら行なう。</p> <p>(2)「水道」「電気」「道路」の3つのプロジェクトのうち、どの事業がもっとも必要かを班で話し合う。</p> <p>(3)班の結果を発表し、気づいたことをワークシートに書く。</p> <p>(4)ミラクルカードを配布し、「今の私にできること」というテーマのもと、自分にできる支援を考えて記入する。</p>	<p>(1)JICA 横浜 教師海外研修で得た写真</p> <p>(2)JICA 横浜 教師海外研修で得た動画</p> <p>(3)ホワイトボード</p> <p>(4)ホワイトボードマーカー</p> <p>(5)ミラクルカード</p>
12	<p>テーマ:今の私にできること</p> <p>ねらい:教師海外研修で訪れたタンザニアの子どもたち(ンゴメ小学校)から届いた手紙を読み、今までの学習を振り返りながら、気づいたことを話し合う。</p>	<p>(1)ンゴメ小学校の紹介を、写真や動画をみせながら行なうとともに、アフリカの「カリブ精神(※客人をもてなす文化)」について触れる。</p> <p>(2)ンゴメ小学校より届いた手紙を読み、気がついたことを話し合い、発表をする。</p>	<p>(1)ミラクルカード</p> <p>(2)JICA 横浜 教師海外研修で得た写真</p> <p>(3)JICA 横浜 教師海外研修で得た動画</p> <p>(4)ンゴメ小学校より届いた手紙と写真</p>

※3月に行われる学年行事(学年合唱祭)の練習で子どもたちに呼びかけをして、タンザニアのンゴメ小学校の子どもたちに向けて「日本の歌」を送る活動を進める。

◆ 授業の詳細

1 時間目 タンザニアってどんな国だろう？

統計データより、タンザニアという国はどんな国であるのかをクラスで予想した。

「自然が豊か」「動物がたくさんいる」という、自然的な魅力を話す生徒がいる一方で、「戦争」「貧しい」「食べ物がない」「学校に行けない」といったマイナスのイメージを話す子どももたくさんいた。

(子どもより出てきたイメージ)

歴史・文化など	自然環境など	人々の生活など	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・ アウストラロピテクス ・ アパルトヘイト 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然が豊か ・ アフリカゾウ ・ ライオン ・ 動物がたくさんいる ・ サファリ ・ 道が赤い ・ 暑い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 貧しそう ・ (平均寿命が短いことから) 食べ物がいないのではないか ・ (中等学校の就学率が低いことから) 学校に行けない子どもが多いのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戦争が起きている ・ 戦前の日本と同じところがある ・ テロ ・ 素朴だけど日本にはない良さがある

※明らかに誤ったイメージも出てきているが、そのまま掲載した。(1時間目の終了後に指導を行った。)

2・3 時間目 タンザニアの子どもたちに手紙を書こう！

夏休みに教師海外研修でタンザニアに行くことを伝え、子どもたちと手紙の交流をすることを話した。初めて聞くスワヒリ語のあいさつなどにとまどっていたが、生徒同士で情報を交換しあって言葉などを確認しあい、翻訳ソフトや本なども活用しながら手紙を作成した。

なお、写真は学活の時間(クラスレクリエーション)や部活動の時間を利用して撮影し、手紙に添えた。絵を描いてきた生徒もいた。



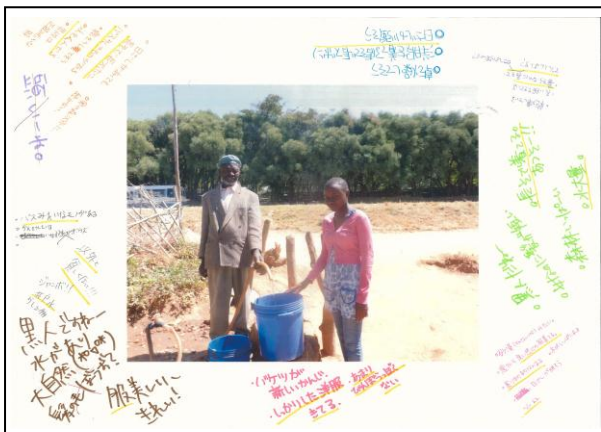
子どもが作成した手紙の一例 (黒字：スワヒリ語 赤字：英語)

4時間目 そうだったのか！タンザニア！

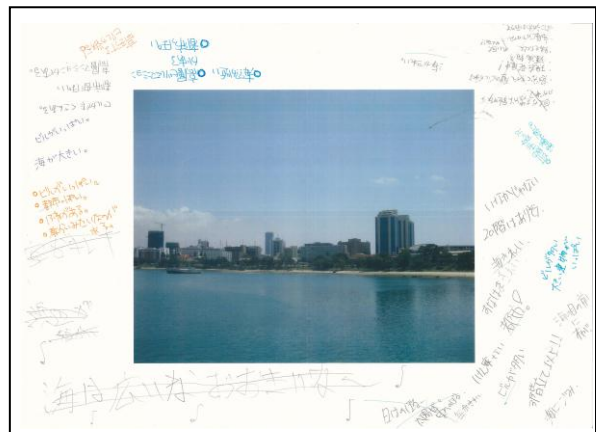
教師海外研修後の初授業であったので、タンザニアで得た写真や動画などの資料を見せながら、事前に話し合った“イメージとのちがいを、フォトランゲージの手法を用いて考えた。写真の選び方としては、1時間目に出したイメージを揺さぶりたかったので、意図的にそれとは異なる部分を感じられる写真(都市部の写真)を選んだが、一部は事前に出たイメージとあまり変わらない写真(農村部の写真)も混ぜて12枚ほど準備し、子どもたちに9枚を選んでもらうような形で進めた。また、複数の写真に触れてほしかったため、ワールドカフェという手法を取り入れて座席を交換するなどした。

子どもたちは、事前の予想とは異なるタンザニアの写真に驚いたようであったが、タンザニアにある国内の格差に関する指摘をする生徒もいた。

(授業で使用した写真の一部)



タンザニア 農村部の共同水道より



タンザニア ダル・エスサラームのようす

※ フォトランゲージ : 写真から読み取れる情報を話し合う。

写真の脇に、気がついたことをどんどん書き、それをもとに話し合った。

※ ワールドカフェ : ささまざまな人と、自由に写真について話し合う方法。

この実践では、写真を9枚(4人班に1枚)使用し、時間を決めてメンバーチェンジをしながら進めた。

(生徒の反応)

農村部の風景写真から	都市部の風景写真から	農村部の学校の写真から	都市部の学校の写真から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 大自然 ・ レンガのような物がある ・ 頭に荷物をのせている ・ しっかりとした服をきている ・ 日差しが強そう ・ 乾燥してそう ・ 意外と貧しくなさそう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高層ビル&マンションがある ・ ビルが多い ・ 田舎ではない ・ 海がきれい ・ 砂浜に漂流物がある ・ 現在発展中! 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 光がほとんどない ・ 窓が少ない ・ 民族衣装 ・ みんな制服を着ている ・ 年齢がバラバラ ・ クラスの人数が非常に多い ・ 生徒は眼鏡をつけていない ・ くつがビーチサンダル 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一台、パソコンがある ・ 電気がついている ・ 日本の中学校にもある机 ・ 建物がしっかりとしている ・ 英語 ・ 日本人が教えている ・ きれい ・ 平和そう

※提示した写真は、その他にマーケット、幹線道路(動物がいるもの)、インターネットカフェ、夕日鑑賞の写真である。

5時間目 タンザニアで知り合った人々と私たちの暮らし

事前に行なったクラスの生徒のアンケートと、タンザニアで取材した6名の人々（6人班あたり1枚）のアンケートを比較し、自分たちとの共通点は違うところを発見した。アンケートの結果にたくさんの違いがあり、子どもたちはさまざまなことを考えたようであった。事後に、中間まとめとして、今までの授業をすべて含めて、感じたことや考えたことを記入した。

(アンケートについて)

2年6組 アンケート結果

1. 大切なものは？

- 家族 友達 友情
- 自分 ペット
- 命 生きること 今 心
- 思い出 小6の時の写真
- 夢 お金
- 少女時代 大國男児 b1a4 EXILE ゴールデンボンバー
- 小倉唯 音楽
- アニメ
- 人間関係
- ケータイ iPhone
- 自分の部屋

2. 今欲しいものは？

- ゲーム
- マンガ 本
- CD
- ケータイ
- 人形
- 金
- 学力 頭脳
- テスト期間中の睡眠時間
- 責任感
- ドラえもん
- どこでもドア
- リュック
- 服
- シューズ フーツ
- ラケット
- ハイエアのグッズ
- 財布
- だまばくら
- ギター
- iPod
- メガネ
- お菓子
- 楽譜
- ライブのチケット
- 韓国行きの手ケット
- 芝生のグラウンド
- 雨さん

3. 将来の夢は？

- 公務員 …… 地元のために働きたい
- サッカー選手などのスポーツ関係の仕事 …… 好きだから 小さいころからの夢
- ゲームクリエイター …… 自分のアイデアを生かせる仕事をしたい
- イラストレーター …… あこがれ
- 人から必要とされる仕事
- 保育士 幼稚園の先生 小学校の先生 …… 子どもが好き 小学校の担任の先生への尊敬
- ピアノの先生 …… ピアノの楽しさを伝えたい
- 役者 …… あこがれ
- 料理関係 料理人 …… 料理が好き 人を喜ばせたい
- バリバリ働く人 …… 働きたい
- 安定した収入のある仕事
- 特になし わからない

タンザニアで出会った人々 (3)



NAME	ハナフィ
年 齢	18歳
大切なもの	母親
欲しいもの	教育を受けること
将来の夢	良い人生・人々を助ける
学校に行く理由	夢をかなえるため

★ JICAの教育プロジェクト視察をしたイフンダという町で会いました！

(アンケートの比較より読み取れること)

- ・日本の子どもたちのアンケートからは、具体的な「モノ」が欲しいという回答が目立つが、タンザニアのアンケートでは「教育を受けること」というような回答が多く、モノを挙げた人はあまりいない。
- ・将来の夢では、日本の子どもたちのアンケートでは、具体的な職業を挙げるか、「まだない」という答えが目立つが、タンザニアでは圧倒的に「学校の先生」という答えが多い。

(生徒の感想 [4・5時間目のまとめ])

○考えたことや感じたこと

- ・子どもたちの夢やほしいものがぜんぜん違って、日本は裕福だなと思いました。
- ・ケータイとかを普通にもっていて意外だった。ビルやお店のようすは日本と少し似ている。
- ・今の自分の生活を見直すことができるかも。大切なものは「教育」というのが…。
- ・日本はすべてのことが「あたりまえ」となっているのがわかった。
- ・車が渋滞するくらい多いのには驚いた。貧しい人とそうでない人の差が激しい。
- ・ダンスや踊りなどを楽しそうに踊っていて、そういう文化を大切にしているのかなと思った。
- ・幹線道路から野生の動物がみられるなんて、自然が多く残っているのだなと思った。
- ・日本と比べると宗教が人々の生活の一部になっていて、宗教を信仰している人がたくさんいる。

6・7時間目 カカオ農園で働く子どもたち

この授業は、学年全体で取り組んだ。今までの授業のなかで、タンザニアという国のイメージを膨らませるとともに、タンザニアという国のさまざまな面に着目させることはできたが、まだ「アフリカは日本とは違う異国の国」と感じている生徒が多くを占めていた。そこで、K-DEC（かながわ開発教育センター）で開発しているワークショップを参考にしながら、日本とタンザニアのつながりに注目させようと考えた。

また、前回までの授業で、タンザニアのさまざまな格差に関する感想が見られたので、ワークショップ後に「貧困や児童労働をなくす9つの方法」というテーマのもと、ダイヤモンドランキングを行なった。

(チョコレートあげる / あげない に関する生徒の意見)

○チョコレートをあげる

- ・1度食べて味わい、今度は「自分で食べるぞ！」と思ってほしいから。
- ・カカオを作ることで、自分たちの仕事に誇りを持ってほしいから。自分たちがどれだけすごいものをつくっているのか、知ってほしい。
- ・自国で生産したものを自国で加工できれば、先進国に近づくので、その力になってほしい。
- ・あげなかったら何も変わらないけれど、あげることで何かが変わる可能性があると思ったから。
- ・自分の知らないもののために仕事をずっとするのはかわいそう。元気づけたい。
- ・子どもたちによろこんでもらいたいから。子どもたちも食べたいと思っているはず！

○チョコレートをあげない

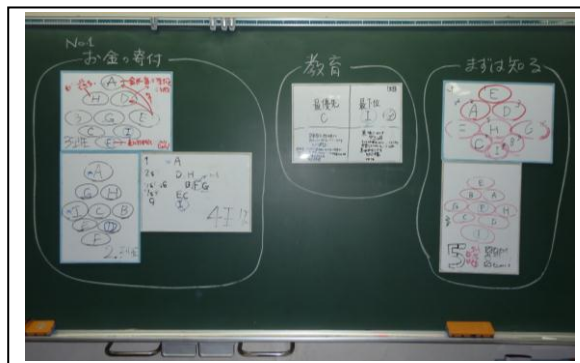
- ・二度とチョコレートを食べられないと思うと、悲しくなると思う。「また食べたい」となると、気持ちをもてあそぶことになる。
- ・ただの「同情」になってしまい、本人たちが傷つくかもしれない。
- ・他の人たちもきつと欲しいはずだし、特定の子どもだけにあげて良いのだろうか。
- ・チョコレートは一度食べたらなくなってしまうので、何かモノ（サッカーボールなど）をあげれば良い。
- ・チョコレートを食べることが夢になってしまう。仕事をする気がなくなるかもしれない。
- ・「日本人はこんなにおいしいものを食べてズルい！」と思うのではないか。
- ・チョコレートの製造方法を教えてあげるべき。

※ 「あげる」と回答した生徒の割合と、「あげない」と回答した生徒の割合は、ほぼ半数ずつであったが、1時間目～5時間目の授業を行なっているクラスの回答は「あげない」という割合が7割を占めていた。

(ランキングに関する生徒のようす)

「貧困・児童労働をなくす方法」として、以下の9項目をあげて取り組んだ。

- ユニセフなどの機関に寄付をする。
- フェアトレード商品の購入。
- みんなでお金を出し、学校を建てる。
- 現地でボランティア活動をする。
- 格差について知り、他の人に伝える。
- 現地でおみやげをたくさん買う。
- 中古のものを現地に送る。
- ペットボトルキャップを集めてワクチンを送る。
- 日本の最先端技術を現地に広める。



ホワイトボードを用いて、話し合いを整理したようす

※6班中3班が、A「お金の寄付」を最上位にランキングし、F（みやげもの）やI（日本の技術）は比較的下位にランキングされていた。E（格差を知り、伝える）については、班で評価が分かれた。

8・9時間目 ちがいのちがい

前時のランキングで、多くの班が、「お金を寄付する」という案を上位にあげていたが、「支援とはなんだろうか」ということについて考えることや、開発途上国でおこっていることを「遠い国の出来事」として捉えるのではなく「自分事」として捉えるということを重ねて、生徒が感じた「タンザニアと日本のさまざまな違い」のアンケートをもとに13枚のカードを作成し、それを仕分けする活動（「ちがいのちがい」）に取り組んだ。

仕分けをした後に、「あってもよいちがい」「あってはいけないちがい」を班で考え、その前後に、音楽を聴いて歌詞の意味を考える活動を組み合わせた。これらの活動から、意見に変化が出てきた生徒もいた。

（ちがいのちがい タンザニア&日本編 カード一覧）

①欲しいモノを聞くと、日本の2年6組の中学生はモノ（ゲームや本など）を欲しがっているが、タンザニアの子どもは「仕事」や「教育を受けること」という答えが多い。

②将来の夢を聞くと、日本の2年6組の中学生たちは具体的な職業をあげるが、「わからない」という答えが多いが、タンザニアの子どもは「先生」という答えが圧倒的に多い。

③タンザニアのローザさんの肌の色は黒い（茶色い）が、日本の廉くんは白（黄色い）い。

④日本では教育制度が充実していて学校に行くのは「当たり前」になっているが、タンザニアの子どもは学校に行き勉強したいと答える子が多い。

⑤日本の建物はほとんどがコンクリートでできているが、タンザニアでは土や泥でできている建物もある。

⑥日本は核家族化や高齢者の孤独死が問題にあがる。タンザニアでは、家族が一緒になって働くことが多く、家族のきずなが強い。

⑦タンザニアの農村部では水道設備がある家は少なく、共同の井戸の水を使うが、必ずしも安全ではない。日本では、蛇口をひねるといつも水が出る。

⑧タンザニアでは、民族の踊りや歌を大切にしている人が多く、若者でもよく知っている。日本では、若者はそういうことに無関心の人もいる。

⑨日本の学校は1クラス35人程度であるが、タンザニアでは50人以上が1つの教室で学んでいることもある。

⑩タンザニアの町では、夜が明け前から大音量でアザーン（イスラム教の礼拝の合図）が流れるが、日本ではそんなことはない。

⑪日本は医療が発達し、医療費を支払って病院を受診すれば、多くの病気が治る。タンザニアでは5歳以下の医療費は無料で受けられるが、病院の数が少なく、医師も不足している。

⑫タンザニアでは良質のコーヒー豆が生産されるなど、農業に従事する人が多く盛んであるが、日本では農産物は自給率が低く、農業に従事する人も減少しており、多くの作物を輸入に頼っている。

⑬日本には自動車メーカーがいくつもあり、たくさんの車を外国に輸出しているが、タンザニアには自動車メーカーはなく、日本から輸入した中古車がたくさん走っている。

実際に授業で使用した「ちがいのちがい タンザニア&日本編」カード

※このカードの作成にあたっては、以下の方々にアドバイスをいただいた。

K-DEC	木下 理仁 さん
JICA タンザニア	足立 史子 さん
天童市立第二中学校	松島 久美 先生
川崎市立西高津中学校	伊東 悠太 先生

(生徒のようす)

カードの仕分けでは、意欲的に意見を述べているようすが見られ、小さなカードをいろいろと動かしながら、班で活発に議論をしていた。また、付せんを利用してクラス内で交流をすすめる、さまざまな見方や考え方があることに驚いたり、考えなおしている姿が見られた。



①・班で話し合いながら仕分けをすすめる
・「あってもよいちがいがいい」「いけないちがいがいい」を一言でカードにまとめる



②・別の班の仕分けの結果を見に行く
・付せんに気がついたことを記入し、貼る



③・作品が完成する



④・もらった付せんのコメントに注目しながら気がついたことを書きだす

(音楽「We are the world」を聞いた生徒の感想の変化)

	「ちがいのちがいがいい」を実践する前	「ちがいのちがいがいい」を実践した後
Aくん	地球の子どもたちを救おうという気持ちがある歌。貧しい子どもを応援している。	困っている人を助けるために、その人の声を聞かなければいけない。社会の問題から逃げずに向き合って、国のちがいを認め合わなければいけない。
Bさん	本当に困っている人を元気づけたいという想いが伝わってきて、考えさせられる歌だった。	アフリカの人を助けたいと思うことは良いことだと思うけど、どうすればよいかわからないし、アフリカの人はどう感じるのだろうか。
Cくん	人種とかを超えたものを伝えようとしている。	目に見えるところだけではなく、目には見えないところを助け、文化を残すチャリティーが必要だと思った。目には見えないことの支援が本当の支援だ。
Dさん	アフリカの人たちを助けようとしている感じがする。アフリカの人は、先進国から助けられてどう思っているんだろう。	他国の人にはアフリカの一部しか見ていない。アフリカにも、他国と同じように発展している部分はあるから、「貧しい」わけではないと思った。

10・11時間目 村を発展させよう！

JICA事業で訪れたタンザニアの村について、その話し合いを教材化し、「水道」「電気」「道路」の3つの中から、「10年後に村が発展するのに必要なものは」というテーマのもとで話し合い活動を行なった。

多くの班で「水道」を第一優先にする生徒と「道路」を第一優先にする生徒で意見が割れており、真剣な議論をしている姿が見られた。電気を選ぶ生徒はほとんどいなかった。

プレゼンテーションののち、「今の私にできること」というテーマでカード（ミラクルカード）を記入した。「募金」を挙げる生徒も多くいたが、7時間目のランキングの結果と比べると少なくなり、理由もよく練られたものになっていると感じた。また、「人とのつながり」「交流」「まずは知ること」というような答えが増えており、タンザニアで起こっている様々な問題を「遠い国のことではなく、自分の問題と同じように」考える姿も感じられた。

(生徒のようす)



班での話し合いのようす



→ ホワイトボードで意見をまとめる



→ 班で話し合ったことを発表

(生徒の感想から)

	個人の意見→班の意見	感じたこと	ミラクルカードの記述
Aくん	水道 → 道路	「支援」というのは、される側がどういこうことをしてほしいかが大切だと思う。なんでもかんでもあげるのではなく、人のことを考えて、一緒に頑張ることが支援だと思う。	「応援してあげること」 ・その人の気持ちになって、応援してあげることがまずは必要。
Bさん	水道 → 道路	日本と比べると、まだまだしいところがたくさんあり、格差も大きい、「かわいそうだから」という同情だけで支援をしても、相手のためにはならない。相手を理解することが必要だ。	「世界の貧しい国のことをしっかりと理解する」 ・理解することで、考えが広がると思うから。
Cくん	道路 → 道路	タンザニアについて、知らないことが多くてイメージが大きく変わった。地方はまだ貧しく、支援の必要があるが、その国が解決できることはその国で解決すべきだと思った。	「募金をする」 ・少しのお金であっても、その国の発展に使ってもらえるならいいのではないかな。
Dくん	道路 → 水道	村の状況をよく知らなかったの、村の授業は衝撃だった。まだ発達していないところもあるのだなと思いました。私たちができることがあるなら、なるべく行動に移したほうが良い。	「人と人が助け合えるように、笑顔の道路（ネットワーク）をつくること」 ・最後は人のつながりが一番必要なのではないかな。

12時間目 今の私にできること

前時の「ミラクルカード」を掲示してクラス全体で振り返った後、タンザニア・ンゴメ小学校より届いた手紙を子どもたちに渡した。子どもたちは以前からこの手紙の返事を楽しみにしており、返事がもらえたことに歓声をあげて、笑顔を見せていた。友達の手紙と見比べて、日本語訳をし合いながら話している姿が印象的であった。



← タンザニアより届いた手紙と書いてくれた子ども
↓ 手紙をもらった西高津中学校の子どもたち



※ この手紙の交流企画は、青年海外協力隊員で、ンゴメ小学校で勤務されている谷村 祐樹隊員に協力をしていただき、実現できた。現在、クラスでは更なる交流を目指して、話し合いが行われている。

◆ 成果と課題

「タンザニアで起きている出来事を、遠い国で起きている事で終わらせるのではなく、日本と同じようにそこには人が住んでいて、生活をしているということを感じてほしい」という、JICAタンザニア事務所の足立さんの言葉に衝撃を受けて、常にそのことを頭の片隅に置きながら授業をすすめていきました。最初はどこか「人ごと」であったり、「興味本位」で授業を受けていた子どもたちが、さまざまなワークショップを通じて意見をぶつけ合うようになり、最後の話し合いでは「支援」ということの難しさや意義に気がついている姿が見られたのは、とてもうれしいことでした。6・7時間目の授業で「チョコレートの製造方法を教えるべき」という意見が出てきたり、10・11時間目の授業でも「支援される側の気持ち」「自国でできることは自国で」というような意見が出てくるなど、開発教育の核心に迫る回答が出され、それについて議論し焦点化できたことはとても有意義なことでした。また、授業の最後に記した「ミラクルカード」には、「いっしょに遊ぶ」「一生懸命に勉強をして将来アフリカに行きたい」といった、人と人との交流に関する記述が多く見られ、心あたたまる気持ちになりました。

このような成果がある一方で、もちろん課題も残りました。「感じてほしい」という気持ちが前面に出すぎてしまい、やや強引な声かけになってしまった部分も多く、また、あれもこれもと欲を出しすぎたあまりに生徒が混乱してしまう場面もありました。6時間目以降の授業は話し合い活動やワークショップが中心であったため、そのテーマの設定には今でも疑問が残りますが、最後に生徒がたくさんの気づきを書いてくれて、改めて生徒自身の持つ力のすごさを感じることができました。多感な年代の子どもたちを相手に、このような機会を与えてもらって開発教育授業を行なえたのは、とても意義のあることなのではないかと思えます。

最後になりますが、この授業では同僚の先生方をはじめ、多くの方々から支えていただき、何とか一つのまとめをむかえることができました。特に、K-DECの木下理仁さんには、授業の進め方の相談や資料の提供など、さまざまな面でアドバイスをいただきました。本当にありがとうございました。

◆ 参考資料

- 開発教育協会（2011）『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 第3版』 開発教育協会
- 田中 優ほか（2006）『世界から貧しさをなくす30の方法』 合同出版
- 田中 治彦（2008）『国際協力と開発教育 ～「援助」の近未来を探る～』 明石書店
- 岩附、白木、水寄（2007）『わたし8歳 カカオ畑で働きつづけて』 合同出版
- ショイルマン著、岡崎訳（2009）『パパラギ』 ソフトバンク文庫